

善をしる。

一、心にいやしき時は、願おこる。いやしからざれば、願なし。

一、心にまよひある時は、人をとがむる。まよひなき時は、とがむる事なし。

一、心に誠ある時は、分を安ず。誠なき時は分を安ぜず。草々の程々におけ露の玉おもきは落る人の世の中

一、生髮剃と鬢剃

生髮剃ふかきりと鬢剃びんせきりとは格別の事也。生髮剃は大方着袴と同時に被行の儀式、男女ともに三五歳の時節也。鬢剃の儀は十三歳許の女子に有之儀式也。

一、陽廣公御作の一本種・自論記・百首御歌等の事

自論記は淺井源右衛門一政御池十六郎學問を好申儀御好被遊、御自作の物拜見被仰付候内、自論記其一也。一政はじめは御近習相勤候所、病身に罷成御斷申上、引籠罷在候得共、不絶御懇に被遊、右之御自作も拜見被仰付候。毎度夜分深更に及候が、手水し袴着し拜見の儀、秋涯十歳内外の儀にて慥に覺中候。一本種は、井上三太夫祖父六左衛門、御小將御納戸

役相勤覺罷在候。大猷院様理學御好被遊、陽廣公御學問好の事御聞被遊、何ぞ御作り被上候様に御所望にて、一本種御撰被爲上候旨、六左衛門並佐々木道求・板津檢校等語申候。秋涯話。百首御詠歌は慥に御作之儀、横山山城守長知拜見の後書狀有之候に付疑無之事。

退而忠愛、寶曆七丑二月、上取兩左衛門御儀より借用寫之。別紙に有之。御歌の本に山城守長知より、岩城と申老女中への書翰もあり。

一、享保三年異國船打拂の注進

享保三年四月十六日、異國船爲追拂子の上刻三領申合、若松・藍嶋雙方へ別れ、唐船の左右より夜中密に乗寄、十七日未明より筒役船二十艘にて、二十目・三十目玉の抱筒を以て無透間打掛申候。唐船八艘藍島・白島の間に漂流いたし候所、同瀬其方より乗寄せ、唐船の五六間又は七八間程寄候て段々打掛、ぼさ棚・舳先・艦廻り・棚板・彌帆・本帆、帆柱水際より上所に相破候。其故唐船甚致迷惑退兼申候。唐人二三員も玉に中り候様に見及候。其外怪我人數多有之候様に、船底へ倒落候唐人多相見え候。

一、筒役四十人並手替共に打放つ玉數、凡千四百放餘にて御座候。船へ玉數打出し候得共、艦廻り高く或は追筋違、

又は向筋違に打當申分は、何れも玉それ行申候。尤唐船の儀は艦舳高く水際上り有之に付、舳下・艦尾等へ中り候玉は、抜不申様に相見え申候故、玉數多少打出申候。

一、唐船八艘共に段々取廻し打出し候。玉、水際はそれ行通り不申候と相見え候。打すくめ申候故退兼候得共、辰の上刻東風強く吹出、唐船乗出候に付、白鳥・女島前途追打、凡白嶋より山鹿沖迄五里追掛、無透間稠敷打掛候故、遙に逃行候。山鹿沖にて雙方申合せ、此所引拂、未の刻に引取申候。右は黒田肥前守殿家來より、江戸迄注進の趣。

一、隠州には舊冬以來數艘滯船仕り、陸へ上り、燒火權現の神木を切候て、薪の用意等仕候。然所唐船三艘に俄に甚烟立上り、火災と相見え候に付、唐人驚き船に乗り見申候得共、火事にて無之候。然所脇に有之候唐船、又甚火災の様に相見え候に付、唐人ども大に恐怖いたし、右伐取申神木不殘陸へ上げ、神の祟を恐れ申段、隠州より申來候。是に限不申、燒火權現の奇瑞無隱儀、此度の奇特唐土迄も聞え可申と、萬人奉信仰候に付申進候。

右は松平出羽守殿家來鶴飼兵藏注進狀。